



びもまた、ニセモノだと思っただけです。

・冗談による笑いは、世界を開き、これまでと異なる見方を一瞬に導入するような効果をもつことがある。八方ふさがりと思えるとき、笑いが思いがけぬ方向に突破口を開いてくれる。

・自立ということは、依存を排除することではなく、必要な存在を受け入れ、自分がどれほど依存しているかを自覚し、感謝していることではなからうか。依存を排して自立を急ぐ人は、自立ではなく孤立になってしまう。

・人間の心がいかにわからないかを骨身にしみてわかっている者が「心の専門家」である、と私は思う。素人は「わかった」と単純に思いこみすぎる。というよりは、「わかった」気になることによって、心という怪物と対峙するのを避けるのだ。

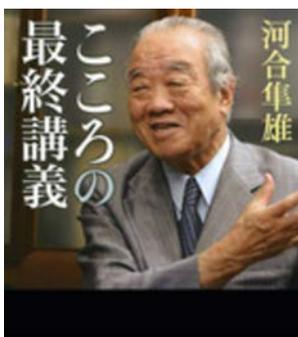
・「まじめに、真剣に」ということにとらわれると視野が狭くなります。これは一番怖いこと。視野を広げるために一番大事なものは、「道草、ゆとり、遊び」である。

・思い屈するような心萎える時間こそ、心がしなっている状態で、重い雪をスーツと滑り落とし、しなう心を持つているんだと感じて、憂鬱で無気力な自分をも認めたほうがいいんじゃないでしょうか。

小林 努 先生



普段私たちがこころのどこかでは納得しているが、なかなかとばにできないような常識をエッセイとしてまとめたものである。その内容は26作目を数える上前淳一郎の人気シリーズ「読むクスリ」に通じるものがあり、人々の疲れ気味のこころを癒してくれる。



「物語」を読み解き、日本人のこころの在り処に深く鋭く迫る河合隼雄の眼……伝説の京都大学退官記念講義を収録した貴重な講義録。

## 『泥流地帯』

三浦綾子 著

大正十五年五月、北海道十勝岳大噴火。突然の火山爆発で、家も学校も恋も夢も、雪解け水と硫黄の入り交じった泥流が一気に押し流してゆく……。上富良野の市街から離れた山奥の集落で、貧しさにも親の不在にも耐えて明るく誠実に生きてきた拓一、耕作兄弟。長男拓一は親に変わって家族を支えるために小学校卒業と同時に農家を継いだ。次男耕作は、姉や妹の人生を考えて、一番で合格した中学校を辞退。十代前半にして小学校教師として社会で働き始めた。そんな彼らの上にも、泥流は容赦なく襲いかかる。「真面目に生きても無意味なのか？」

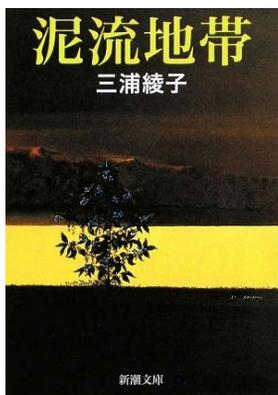
作者三浦綾子は北海道出身のクリスチャン女性である。十代は戦争のただ中、小学校教員として勤務。二十代から三十代にかけては、脊椎カリエス（結核菌による病気）によりベッドで寝たきりの生活を送る。三十七歳で奇跡的に病気が癒やされ、二歳年下の夫光世と結婚。晩年にはパーキンソン病（筋肉の病気）が発症し、夫の介護を受けながら、口述筆記（綾子が言った言葉を光世が書きとめ本にする。）によって、多くの作品を夫婦二人三脚で作りに上げた。

貧しさ、寂しさ、病、困難、苦難……どれもできれば避けたいものである。しかし、苦しみや痛みは経験した者にしかわからないだろう。そして、経験した苦しみや痛みによって、私たちは他人を理解し、助け、愛することができるのではないだろうか。三浦綾子作品の根底に流れる瑞々しい愛に触れられる一冊である。

大山 真似先生



三浦綾子  
(1922~1999)



※ 図書館だよりは図書館にありません。必要な方は図書館まで。

また、今回紹介された本は図書館にあります。是非読んでください。